

世界へ届け、核兵器廃絶の思い

平和祈念式典



原爆死没者名奉安



献水



平和への誓い



合唱 千羽鶴



高校生による司会



折り紙に包まれた1日でした

8月9日、被爆者や遺族のほか、安倍晋三首相、政府関係者、世界各国の代表など約5,900人が参列し、被爆69周年長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典が平和公園で執り行われました。

式典では、田上市長が長崎平和宣言で、核兵器保有国とその傘の下にいる国々に向けて、「核兵器のない世界」の実現のために、いつまでに、何をするのかについて、核兵器の法的禁止を求める国々と協議の場をつくるよう訴えました。

また、「平和国家」としての安全保障のあり方をめぐる議論を機に広がった平和への不安と懸念の声に、真摯に耳を傾けるよう、日本政府に求めました。

このほか、被爆者代表の城臺美彌子さんによる「平和への誓い」、被爆者合唱団「ひまわり」、山里小学校の児童、純心女子高等学校の生徒の皆さんによる合唱などが行われ、原爆犠牲者の冥福を祈りました。

次世代へつなぐ平和への思い

原爆で多くの児童や教職員が犠牲となった城山小学校や山里小学校をはじめとした市内の小・中・高校でも、平和について考える集会が行われました。

また、来年開催を予定している「世界こども平和会議」のプレ大会が開催されました。9カ国の中高生が淵中学校の生徒たちと平和な世界をつくるための取り組みについて話し合い、「相手の気持ちを考える」などの意見が出されました。

その他、「平和の灯」「青少年ピースフォーラム」「親子記者」なども行われ、参加者は、犠牲者を追悼したり、平和の大切さを学んだりしていました。



世界こども平和会議

平和の灯



城山小学校

山里小学校



青少年ピースフォーラム

親子記者

長崎平和宣言



69年前のこの時刻、この丘から見上げる空は真っ黒な原子雲で覆われていました。米軍機から投下された一発の原子爆弾により、家々は吹き飛び、炎に包まれ、黒焦げの死体が散乱する中を多くの市民が逃げまどいました。凄まじい熱線と爆風と放射線は、7万4千人もの尊い命を奪い、7万5千人の負傷者を出し、かろうじて生き残った人々の心と体に、69年たった今も癒えることのない深い傷を刻みこみました。

今も世界には1万6千発以上の核弾頭が存在します。核兵器の恐ろしさを身をもって知る被爆者は、核兵器は二度と使われてはならない、と必死で警鐘を鳴らし続けてきました。広島、長崎の原爆以降、戦争で核兵器が使われなかったのは、被爆者の存在とその声があったからです。

もし今、核兵器が戦争で使われたら、世界はどうなるのでしょうか。

今年2月メキシコで開かれた「核兵器の非人道性に関する国際会議」では、146か国の代表が、人体や経済、環境、気候変動など、さまざまな視点から、核兵器がいかに非人道的な兵器であるかを明らかにしました。その中で、もし核戦争になれば、傷ついた人々を助けることもできず、「核の冬」の到来で食糧がなくなり、世界の20億人以上が飢餓状態に陥るという恐るべき予測が発表されました。

核兵器の恐怖は決して過去の広島、長崎だけのものではありません。まさに世界がかかえる“今と未来の問題”なのです。

こうした核兵器の非人道性に着目する国々の間で、核兵器禁止条約などの検討に向けた動きが始まっています。

しかし一方で、核兵器保有国とその傘の下にいる国々は、核兵器によって国の安全を守ろうとする考えを依然として手放さず、核兵器の禁止を先送りしようとしています。

この対立を越えることができなければ、来年開かれる5年に一度の核不拡散条約(NPT)再検討会議は、なんの前進もないまま終わるかもしれません。

核兵器保有国とその傘の下にいる国々に呼びかけます。

「核兵器のない世界」の実現のために、いつまでに、何をするのかについて、核兵器の法的禁止を求めている国々と協議ができる場をまずつくり、対立を越える第一歩を踏み出してください。日本政府は、核兵器の非人道性を一番理解している国として、その先頭に立ってください。

核戦争から未来を守る地域的な方法として「非核兵器地帯」があります。現在、地球の陸地の半分以上が既に非核兵器地帯に属しています。日本政府には、韓国、北朝鮮、日本が属する北東アジア地域を核兵器から守る方法の一つとして、非核三原則の法制化とともに、「北東アジア非核兵器地帯構想」の検討を始めるよう提言します。この構想には、わが国の500人以上の自治体の首長が賛同しており、これからも賛同の輪

を広げていきます。

いまわが国では、集団的自衛権の議論を機に、「平和国家」としての安全保障のあり方についてさまざまな意見が交わされています。

長崎は「ノーモア・ナガサキ」とともに、「ノーモア・ウォー」と呼び続けてきました。日本国憲法に込められた「戦争をしない」という誓いは、被爆国日本の原点であるとともに、被爆地長崎の原点でもあります。

被爆者たちが自らの体験を語ることで伝え続けてきた、その平和の原点がいま揺らいでいるのではないかと、という不安と懸念が、急ぐ議論の中で生まれています。日本政府にはこの不安と懸念の声に、真摯に向き合い、耳を傾けることを強く求めます。

長崎では、若い世代が、核兵器について自分たちで考え、議論し、新しい活動を始めています。大学生たちは海外にネットワークを広げ始めました。高校生たちが国連に届けた核兵器廃絶を求める署名の数は、すでに100万人を超えました。

その高校生たちの合言葉「ビリョクだけどもリョクじゃない」は、一人ひとりの人々の集まりである市民社会こそがもっとも大きな力の源泉だ、ということを私たちに思い起こさせてくれます。長崎はこれからも市民社会の一員として、仲間を増やし、NGOと連携し、目標を同じくする国々や国連と力を合わせて、核兵器のない世界の実現に向けて行動し続けます。世界の皆さん、次の世代に「核兵器のない世界」を引き継ぎましょう。

東京電力福島第一原子力発電所の事故から、3年がたちました。今も多くの方々が不安な暮らしを強いられています。長崎は今後も福島の日も早い復興を願い、さまざまな支援を続けていきます。

来年は被爆からちょうど70年になります。

被爆者はますます高齢化しており、原爆症の認定制度の改善など実態に応じた援護の充実を望みます。

被爆70年までの一年が、平和への思いを共有する世界の人たちとともに目指してきた「核兵器のない世界」の実現に向けて大きく前進する一年になることを願い、原子爆弾により亡くなられた方々に心から哀悼の意を捧げ、広島市とともに核兵器廃絶と恒久平和の実現に努力することをここに宣言します。

2014年(平成26年)8月9日
長崎市長 田上 富久

平和祈念式典の開催に尽力したデルノア氏を顕彰

戦後の長崎に軍政部司令官として着任したビクター・デルノア氏(1914-1998)は、昭和23年、長崎市で初めての平和祈念式典の開催に尽力するとともに、「原爆は二度と使ってはならない」という趣旨のメッセージを寄せました。

デルノア氏は多くの長崎市民から慕われ、官舎があった愛宕から油屋町までの道

はかつて「デルノア通り」と名付けられていました。

市では、デルノア氏の功績を広く知ってもらうため「デルノア通り」の看板を復刻しました。8月8日に開催された除幕式には、長崎生まれの長女パトリシア・マギーさんも出席し、「長崎市民を尊敬していた父も喜んでいと思う」と語りました。



デルノア通り看板